

資料2 選考委員のコメント

榎木野衣(美術評論家、多摩美術大学教授)

現在、私たちが直面している異常な事態は、かりに新型コロナウイルス感染症が収束したとしても、根本的に解決されるものではない。現在の世界を支えるシステムそのものが、未知のウイルスに、これ以上ない格好の触媒を提供し続けているからだ。としたら、私たちはいま、ひとつのパンデミックのもとで第一波、第二波のような呼び方をすればいい。より長期的には、さらに異質なウイルスによる別のパンデミックが、ずっと大きな波（メガ・ウェイヴ?）として、第一波、第二波のように到来すると考えたほうがいい。そのようななかで、私たちはいったい、どのような未来を想定すればよいのだろうか。けれども、このようなことになるはるか前から、そのような思考実験こそ、アーティストたちの原動力ではなかったか。そんなことを念頭に置きながら、選考に臨んだ。

藪前知子(東京都現代美術館学芸員)

新型コロナウイルスの芸術生産の現場への影響は深刻であり、これを機に活動をやめざるを得なかった人たちは夥しい数に上るだろう。そのことは胸に留めておかななくてはならない。一方で、この状況に対して、抵抗としてのアートの真価を問うべく立ち上がったのがこのプロジェクトだ。立ち上げた推薦委員が選んだ候補作家から、この状況に対するアクションを期待する作家を選考させていただいた。他者による当事者の表象の是非が問われた東日本大震災と異なり、この状況においては誰もが当事者である。客体化できない、表象できない何かについて、私たちは思考を続けなくてはならないだろう。芸術は常に時代を超えて、硬直した社会に別の可能性を示してきた。彼らの作品を通して、他者との新しい共有のプラットフォームが形作られるのを期待したい。

鷲田めるろ(十和田市現代美術館館長)

新型コロナウイルス感染症により社会は大きく変化した。それは今も進行中で、先を見通すことができない。自らの表現様式を確立している作家よりも、状況に対して柔軟に反応できる作家を選んだ。新型ウイルスの出現は大きくは人間と自然との関係の変化に起因し、気候変動などの環境問題とも関連する。自然との関わり方について視野を広げてくれる作家も重視した。他方、個人的な経験から作品を立ち上げるような作家も候補者リストに含めた。コロナ禍は全世界的な現象でありつつも、各人の置かれた状況により、その経験は大きく異なるからだ。なお、十分な実力があっても他で発表の機会が多くある作家よりも、若手の作家を積極的に評価した。